

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 12 日現在

機関番号：32808

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380961

研究課題名(和文) 家族関係の再構築に向けた支援プログラムの開発と効果研究

研究課題名(英文) Program development for reconstruction of the family relationship and effect research

研究代表者

福丸 由佳 (Fukumaru, Yuka)

白梅学園大学・子ども学部・教授(移行)

研究者番号：10334567

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：家族関係の再構築が求められる里親家庭と離婚家庭を対象に、家族支援に向けた心理教育プログラムの開発とその有効性の検証を行った。里親家庭には大人と子どもの絆を深めるためのCARE (Child-Adult Relationship Enhancement)プログラムを、離婚家庭には米国で開発された移行期の家族に向けたFAIT(families In Transition)プログラムをそれぞれに実践し、その前後における親の意識や親子関係の変化を検討した結果、社会文化的差異を踏まえた各プログラムが関係の再構築が必要な家族に対して、一定の効果があることが示された。実践と研究における今後の課題も検討した。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this research are the development of psycho-educational program targeting families that need reconstruction of family relationship such as foster families and divorced families, and the verification of its validity. We used the CARE(Child-Adult Relationship Enhancement) program for foster families and we practiced FAIT(Families In Transition) for divorced families, both developed in the U.S.. We did the Pre-Post survey for examining the change of parents' attitude and the relationship with children using these programs. We also did some modification to fit the cultural differences. We found both programs are effective on improving the relationship between parents and children and also reducing parental stress.

研究分野：臨床心理学

キーワード：家族関係 家族支援 離婚家庭 里親 心理教育 CARE FAIT 効果測定

1. 研究開始当初の背景

家族のありようが益々多様化する昨今、家族関係の困難や危機に出会う子どもの数も少なくない。関係性の危機に対する予防的な取り組みと同時に、既に困難を経験している家族に対しては、回復や関係の再構築に向けた支援も重要な課題である。家族のライフサイクルにおいて、関係性の危機とそこからの回復・再構築が求められるものに、夫婦関係の消失を伴う離婚家庭、また虐待などの親子関係の危機により社会的養護の必要性が生じた子どもを里子として養育する里親家庭が挙げられる。毎年20万人以上の18歳未満の子どもたちが親の離婚という親子・家族関係の危機を経験し、また、虐待や親の養育困難などの理由により、親元を離れて社会的養護のもとで生活することを余儀なくされる4万人超の子どもたちのうち、5000人近くが里親家庭の中で育つという現状の中で、親・養育者は、新たな家族関係構築の課題に直面することも少なくない。こうした現状を鑑みるに、家族全体を視野に入れつつ、子どもの育ちを保障する心理的支援システムをつくっていくことは、社会的ニーズの高さからも急務であると言える。

2. 研究の目的

本研究は、家族関係の変化に伴い新たな関係構築が求められる、親の離婚を経験する子どもがいる家庭と里親里子の家庭に向けて、予防的視点を包含した有効な支援プログラムの実施と、その効果を検討することを大きな目的としている。具体的には、親の離婚を経験する子どもがいる家庭に対しては、米国で開発された心理教育プログラムのFAIT (FIT 日本名はFAIT: Families In Transition Brown, 1994) を、里親家庭に対しては、子どもとの関係をよりよくすることを旨とするペアレンティングプログラムCARE

(Child-Adult Relationship Enhancement) をそれぞれ実施し、実施前後における質問紙調査や振り返り評価の結果から、家族の関係を支援するプログラムの確定と支援体制の定着を図ることを目的として実践と研究を行った。

なお、FAIT は離婚を経験している親子双方に向けて、米国ケンタッキー州で開発された心理教育プログラムであり、離婚家庭の支援の目的のもと、当該地域においては司法過程に導入されているとともに、その受講が離婚の成立要件となっているものである (Brown, 1994)

一方、CAREは米国オハイオ州シンシナティ子ども病院で開発された、ペアレンティングスキルを扱うプログラムである。子どもとの関係作りに有効であるとされるコミュニケーションをロールプレイなどによって具体的に習得できるよう工夫されたトラウマインフォームドなプログラムという特徴を有している (Gurwich, 2016.)

両プログラムともに、開発者の許可を得て、研究代表者が中心となって翻訳し、日本に導入した。既に翻訳したテキストを用いた実践は開始されているが、本研究でもこれらを用いて研究を行っている。

3. 研究の方法

まず、夫婦関係の解消とそれに伴う親子・家族関係の再構築という課題に取り組む、離婚を経験する家庭に対しては、HPを通して、プログラム参加者を募集した。その際、離婚を経験してからおよそ2年前後をめぐり、さらにプログラムの性質を鑑みて、原則、係争中などの高葛藤の状態にない方をグループへの参加者とした。実施の前にはあらかじめ連絡を取り、プログラムの目的や特徴などを伝えた上で、参加の意思を改めて確認すること、さらに研究の実施に関しては、倫理審査を経た手続きに沿って研究の目的や方法について説明をし、同意

を得られた対象者のみに研究を依頼した。

実践は、1回2時間のグループを2回にわけ
て行い、実践の事前事後の2時点で調査を行っ
た。調査内容は、離婚にまつわる子どもの行
動や親自身の行動に対する親の意識、子ども
に対する親の働きかけなどの実際の行動、に
ついて両時点で尋ねた。また、事後について
は、FAITプログラムへの参加に対する振り返
り評価なども盛り込んだ調査を行った。

一方、里親子という新たな関係構築に取り
組む里親家庭に対しては、行政が主催する里
親向け研修の場で、1回2時間のプログラムを
3回に分けて実施した。FAITプログラム同様、
研究の目的や方法などについて、倫理審査を
経た手続きに沿って説明を行い、同意を得ら
れた対象者のみに調査を実施している。

調査は参加前、実施後1か月時点、実施後3
か月時点の3時点で行った(参加後の回収は
郵送)。調査への協力を同意した人は62名だ
った。使用した尺度は、親のストレスを測定
するPSI-SF、子どもの問題行動を測定する
ECBI、親の養育態度および親子の関係認知を
問う質問項目からなる。また、プログラムへ
の評価や満足感などに関するデータも収集
した。

4. 研究成果

まず、離婚を経験する親子に向けた FAIT
プログラムの実践については、HPの作成およ
びそれを通じた募集をおこなって実践を試
み、併せて、質問紙調査を行った。その結果、
「離婚は子どものせいではないと、きちんと
伝え保証する」、などの親の意識が参加後、
有意に高くなることが示され、心理教育プロ
グラムの受講を通して、子どもの視点からも
親の離婚を捉えるようになるの重要性をよ
り認識し、適切な対応がしやすくなったと感
じていることが示された。

また、プログラム参加後の感想からは、「日
本には、こうした情報や機会が少なく」、参

加することで「親自身が離婚についての思い
を話せる・聞ける場として機能する」といっ
た声からも示されるように、当事者同士で体
験や気持ちを語り合える場が貴重であるこ
とも示唆された。さらに、日本においては、
祖父母を含む3世代を視野にいれた取り組
みも必要であること、単独親権などの我が国
特有の状況を背景とする親の葛藤の高さな
どを十分に踏まえた取り組みが特に求めら
れることも示され、我が国の文化的要因や社
会的制度を踏まえた実施の重要性が改めて
明らかになった。

さらに、参加者からは、離婚を経験する子
どもや家族といった立場にとどまらず、保育
や教育の現場などの専門家をはじめ、多くの
大人が、離婚が子どもに与える影響や大人に
求められる対応などについて共有していく
ことが重要であることも示され、専門家に対
象とした研修などの重要性なども改めて示
された。

また、これらの実践に加え、テーマの性質上、
プログラムに参加できない家族に向けた支援
も重要であることが明らかになったことから、
プログラムへの参加をしなくても、役に立ちう
ると考えられる内容を親や子どもに届けるこ
とを目的として、リーフレットの発行を行っ
た。これは、「離婚を経験するご家族へ 家族
のかたち、子どもの気持ち～親と子が幸せに
なるために～」というタイトルで、全12ペ
ージからなる小冊子(リーフレット)である。

内容は、FAITプログラムの主要部分を抜
粋しており、親の離婚に対して、子どもが心
配しやすいこと、親が子どもにしてあげられ
るといいこと、親の離婚を経験した子どもへ
のメッセージ、祖父母へのメッセージ、など
の内容が含まれている。

こうしたリーフレットは、ファシリテータ
ーがいてその場でやりとりができるプログ
ラム実践と異なり、読み手側がこちらの意図
した内容と異なるメッセージを受け取る可

能性も考えられる。そのため、こうしたリスクや配慮すべき点を十分に検討した上で、研究会に参加するメンバーによる検討を重ねた上で作成を行った。

次に、里親里子家庭に向けたCAREについては、自治体および、その関係機関の主催する里親研修会において、各2時間のプログラムを3回にわけて実施し、参加前後の質問紙調査を行い、プログラムへの評価および有効性を検討した。

その結果、CARE プログラム全体の評価について、里親向けの研修という点から尋ねたところ、9割近くが肯定的な評価をしていた(「とてもそう思う」24%、「そう思う」64%)。また、研修内容は満足できるものだったと答えた人も、9割にのぼった(「とてもそう思う」32%と、「そう思う」60%)。一方、どちらともいえないと回答した中には、里子との生活がまだ短い中で、必ずしもCAREの内容になじむ場面ばかりではないこと、定着して使用するには、さらなるフォローアップの必要性を指摘する声もみられた。

自由記述からは、「実生活でやってみようということがたくさんあった」、「ロールプレイで子どもになってみて、みえることもあり気付かされた」などの具体的な体験が、里子との関係作りに役立つという感想が多くみられた。また、「前週の研修の効果を他の参加者から聞いたのがとてもよかった」、「研修内容も役立つと思ったが、同じように悩む里親さんと交流できたこともありがたかった」などといった感想が寄せられ、里親という同じ立場で参加できることや、前回の内容を踏まえて、里子との間での実際の活用体験を次の回で共有できることで、里親同士の情報交換や知恵の共有といった機能も果たしうることが示された。

さらに、3回の研修の事前(ベースライン)と3か月後の事後の2時点における調査から、PSI-SF(養育ストレス短縮版)の得点を比較

結果、週に2~3日以上(ほぼ毎日、もしくは2~3日に1回程度)CAREのスキルを意識していた群(n=19)では、「親の悩み」以外の「親-子の相互作用機能不全」、「むずかしい子ども」および「ストレス全体」のいずれの得点においても、3か月後に得点が低下していることが示された。つまり、習得した内容を意識する頻度が高い場合、里親のストレス軽減や里子との関係認知に、CAREプログラムによる効果があることが示唆された。CAREは通常、3~4回程度で実施することが可能であるが、その後の定着をどのようににはかっていくかが、重要であると同時に改めて課題でもあるといえる。

以上、家族関係の変化に伴い新たな関係構築が求められる、親の離婚を経験する子どものいる家庭と里親里子の家庭に向けて、予防的視点を包含した有効な支援プログラムの実施と、その効果を検討した。我が国では、こうした取り組みが未だ十分ではない現状が改めて指摘できるとともに、取り組みの重要性に加えて、実施者側の工夫や配慮が必要なことも示されている。これらの点を学会でのワークショップ等で発表するとともに、論文の中でも指摘を行った。今後は、こうした取り組みを適切に届けられるための専門家養成にも力を入れるとともに、より効果的かつ協働的な支援体制の枠組み作り、また、研究の側面からは、RCTなどのデザインを含めた、より詳細な効果検討を行う必要がある。

引用文献)

- Gurwitsch R., Messer E., Masse J., Olafson E., Boat B., Putnam F., 2016 Child-Adult Relationship Enhancement (CARE): An Evidence-informed program for children with a history of trauma and other behavioral challenges. *Child Abuse & Neglect* 53. 138-145.
- Brown, J.H., Portes, P., Cambron, M.L.,

Zimmerman, D., Rickert, V., Bissmeyer, C.
1994 Families in Transition: A
Court-Mandated Divorce Adjustment Program
for Parent and Children. *Juvenile and
Family Court Journal*, 45, (1), 27-32.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計5件)

・福丸由佳、伊東ゆたか、加茂登志子、木村
一絵 2018 里親向け研修における CARE プ
ログラムの効果の検討：里子と里親の関係作
りに向けたペアレントプログラムの実践
白梅学園大学・短期大学紀要 54 55-65

・福丸由佳 2017 育て、育てられ、育ちあ
うこと - 家族心理学の視点から - *交流分
析研究* 第42巻 第1号 p21-25

・福丸由佳 2014 子どもにとっての親の離
婚 *青少年問題研究* 656号 p34-41

・福丸由佳・小田切紀子・大瀧玲子・大西真
美・曾山いづみ・村田千晃・本田麻希子・山
田哲子・渡辺美穂・青木聡・藤田博康 (2014)
離婚を経験する家族への心理教育プログラ
ム FAIT の実践 - 親に向けた試行実践から得
られた示唆と今後の課題. *明治安田こころ
の健康財団研究助成論文集* 49.

・小泉智恵、中山美由紀、福丸由佳、無藤隆
2018 妊娠期における夫婦関係と親となる
意識との関連 *日本生殖心理学会誌* vol13,
No.1, p 18-25

[学会発表](計8件)

・福丸由佳 2018 ペアレントトレーニング
を中心とした臨床心理学的対応 CARE プ
ログラムを用いた子どもとの関係作り 日
本 ADHD 学会(招待講演)2018年3月

・福丸由佳 2018 国際化・流動化時代に
おける成人期の発達研究の課題と展望 関係
の中における成人期の発達 発達心理学会
シンポジウム 2018年3月

・Kamo T., Fukumaru Y., Kimura H., Kodaira
K., 2018 CARE in Japan 2018 PCIT World
Congress.

・Ohnishi M., Odagiri N., Murata C.,
Soyama I., Sugimoto M., Honda M., Ootaki
R., Yamada T., Fukumaru Y., 2017
Psycho-educational program (FAIT) for
divorce in Japan Annual Conference of
Asian Family Therapy in Transition

・福丸由佳・曾山いづみ・山田哲子・杉本美
穂 2017 離婚を経験した家族への FAIT
プログラムの紹介と実践 家族心理学会

・福丸由佳他 2016 離婚を経験した家族へ
の FAIT プログラムの試行実践(7) - FAIT
プログラム実践の意義と課題 - 家族心
理学会

・福丸由佳他 2016 離婚家庭の関係性支援
における現状と課題 子どもの視点から
離婚について考える 日本心理臨床学会
第33回大会 シンポジウム 225

・福丸由佳 2016 子どもとのよりよいコミ
ュニケーションを目指した心理教育的介
入の実践 日本発達心理学会大27回大会

[図書](計5件)

・福丸由佳 印刷中 親の離婚 家族心理学
ハンドブック 家族心理学会編

・福丸由佳 2017 育てる～幼少期の親子関
係を考える 個と家族を支える心理臨床
実践 金子書房 148-155

・福丸由佳 2017 子どもの自立 個の自立
と関係性の自立 児童心理 金子書房

・福丸由佳 2017 保育者のストレス対処と
キャリアデザイン 保育現場の人間関係
対処法 砂上史子 編 130-149 中央法
規出版

・福丸由佳 2016 仕事と家庭の多重役割
夫と妻の生涯発達心理学 宇都宮博、神谷
哲司 編 p:129-133)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

○研究代表者による招待講演、研修など

東京都児童相談センター研修会(2018)

臨床発達心理士東京支部研修会(2018)

千葉県児童相談所研修会(2018)

東京都教育委員会研修会(2017)

諏訪市保育協会研修会(2017)

那須町教育委員会研修会(2017)

家族相談士心理士研修会(2016)

千葉県臨床心理士研修会(2016)

久留米特別支援学校研修会(2016)

北海道こどもの虐待防止協会研修会(2016)

尾張市教育委員会研修会(2016)

他

○ホームページ

CARE プログラムにかかわる HP

<https://www.care-japan.org/>

FAIT プログラムにかかわる HP

<http://fait-japan.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福丸由佳 (FUKUMARU Yuka)

白梅学園大学・子ども学部教授

研究者番号：10334567

(2) 研究分担者

加茂登志子 (KAMO Toshiko)

国立精神神経センター研究員

研究者番号：20186018

藤田博康 (FUJITA Hiroyasu)

駒沢大学・文学部・教授

研究者番号：80368381